

第10回 JOMF 特別企画セミナー 大阪開催のご報告 (記事スタイル)

2012年1月11日、大阪商工会議所402会議室において 第10回セミナーが開催された。今回は6月3日に東京浜松町貿易センタービルにおいて開催された第7回セミナーの大阪リプレイバージョンとしての性格をもつもの。タイトルは、『海外企業戦士とご家族の感染症リスク対策 ～恐ろしい狂犬病のリスクから社員やご家族を守る為に～』、講師陣も、東京医科大学病院の濱田篤郎教授に『海外における感染症の現状とそのリスク対策としてのワクチン接種の意義・必要性』について、都立駒込病院の菅沼明彦先生から具体的感染症対策例として、特に「発症した場合の死亡率が著しく高い」という『狂犬病』に重点をおき『狂犬病リスクとワクチン接種の必要性』というテーマでお話戴いた。ただ、両先生には、6月3日のリプレイをとお願いしていたが、6月使用の資料を大幅に改訂したものを戴け、それに基づきプレゼンを行って戴いたこと、東京会場で実施した会員企業からも参加者を募ってのパネル討論会については実施せずに両先生とのフリーディスカッションタイムを45分分け活発な討議が行われたのが第7回セミナーとの相違点となる。



大阪会場独特の「V字」レイアウト。お互いの表情も見えし、講師との距離感も近くなり、勢い真剣な雰囲気・・・

—参加者数は？

A: 16名の方に参加戴きました。男女別では女性6名、男性10名と約1:2、職種別では人事・総務・安全管理等の一般参加者が9名、医療職の方が7名で、ほぼ半々でした。大阪での開催はいつも人数少なめでアットホームなセミナーとなっておりますが、今回もアットホームな感じで進み、後述しますが、フリー・ディスカッションの場面では参加者との活発な意見交換もできたのではないかと思います。

—濱田先生発表内容は？

A: 濱田先生には、『海外勤務者の感染症とワクチン接種』と題した講演をして戴きました。東京セミナーより時間が長い60分を当てられたので、先生の新作スライドも判りやすいものになっていた様に思います。

内容的には、

- ① 「海外勤務者(長期滞在者)の健康問題」には、気候関連の疾患や感染症、メンタル障害、生活習慣病などがあるというお話から話を始められ、
- ② 「海外勤務者の健康問題に関する独自調査結果」や「シンガポールの日本人会診療所の受診者の病種」の分析から、「渡航者下痢症」、「蚊に媒介されるマラリアやデング熱」等の各種感染症について解説されました。
- ③ それに続き、「ワクチンの医学的効果」、「ワクチンの経済的効果」等についての解説とともに「海外渡航者への感染症対策」としての健康教育や帰国後健診等の重要性についても説かれていました。



いつも難しい話でも笑顔で判り易く説明される東京医科大学病院渡航者医療センター 濱田先生

—菅沼先生の発表内容は？

菅沼先生のプレゼンについても、6月のスライドをより見やすく、理解し易くしたものを作成され、更に、6月セミナーの際にはお見せすることのできなかつた、「狂犬病対策としての野良犬狩り」に関する昔のニュース報道フィルムも上映して戴くことができました。

内容的には、『狂犬病リスクとワクチン接種の必要性』と題し、

- ① 勤務先の都立駒込病院(感染症科及びワクチン外来)の紹介、
- ② 本題の「狂犬病」について、「狂犬病についての説明」と「狂犬病の予防」とお話を進められました。

この部分は、更に、

(ア) 「数字で見る狂犬病」として、150カ国以上で発生、毎年55,000以上発症していること、毎年1,500万人以上がワクチンを接種していること、死亡率は100%であること等が紹介され、中国の



表情豊かに、でも「怖い話」を展開される都立駒込病院の菅沼先生

統計やバリ島での流行(2008年10月に132名が発症)、そして、日本への輸入感染事例(2006年11月に、数か月前にフィリピンで犬に咬まれた日本人男性2名が相次いで死亡)したことや、加害動物の分析(犬が圧倒的に多いが猫や猿、蝙蝠等も比較的多い)がなされました。

- (イ) 続いて、狂犬病ウイルスについて、感染の経路と感染の仕方について、症状の出方(潜伏期⇒前駆期⇒急性神経症状期⇒昏睡期⇒死亡)について、
- (ウ) 輸入された感染事例(1957年の国内におけるヒト・動物の根絶以後、1970年の一例と2006年の二例しかない)について、2006年末の横浜の男性のケースを引き合いに説明して戴きました。8月に友人の犬に手首をかまれてから、帰国されて11月中央に症状が現れ、20日に「過去に犬にかまれていた」ことを医師に告げられてから転院したが、肺炎、多臓器不全を引き起こして12月初に亡くなるまでの経緯が、咬まれた部位によって潜伏期間が変化するなどの説明も交えて紹介されました。
- (エ) 狂犬病の予防策は、咬まれないようにむやみに動物に近づかないというお話から、咬まれた傷口の処置(流水と石鹸でよく洗いすぐに現地医療機関に！、民間療法は危険！等)以外にはないことや、
- (オ) 曝露後のワクチンの打ち方(接種の回数と間隔)、グロブリン(残念ながらグロブリンを持っている病院は少ない！)の説明等について説明戴き、
- (カ) 最後に、
 - あ) 狂犬病は致死的な疾患であり、
 - い) 世界の広い地域に常在しており、治療方法が確立されていない為に現時点では「発症したら100%死亡」する為、
 - う) とにかく予防(予防接種をして、抗体を作っておくと咬まれた後も対応がより容易になる等)が重要であると纏められていました。

—フリー・ディスカッションの方は？

A: 今回は、16名の参加者の中からパネリスト数名を集めるのは難しいと考えて、講師と受講生が一体となつてのフリー・ディスカッションの場を長めに設けました。45分も時間を取って、質問が出なければどうしようかとも考えたのですが、関西地域での狂犬病セミナーというのは珍しい(アンケート結果)らしく、質問が続々と出てきて、50分近くにもわたり、大変活発な論議が展開されました。討論終了後の濱田先生と菅沼先生の、ホッとした表情、(と同時に)満足そうなお顔が窺えましたし、濱田先生からも、「今日のQ&Aは『いい質問ですねえ』というのもあったので纏めてみてください」との宿題がだされてしまいました(これは一旦終了し今は両先生に「感染症」と「狂犬病」に分けて監修をお願いしていますので、3月には基金のホームページにアップする予定です)。

—参加者の反応は？

A: 「狂犬病についての映像や画像、情報を得る機会が大阪では少なかった」ことや、自由討論の場での「赴任者の一時帰国タイミングの関係からワクチンの接種時期を若干前後させてもよいか?」、「産業医学の面での希望者への抗菌薬を渡すこと」、「タミフルを処方すること」について等、産業医や看護師の方が実際に直面する疑問等についても活発な討論ができたということもあり、満足度が高かったセミナーといえましょう。また、今回は大塚製薬工場からOS-1のサンプル(ペットボトルとジェルタイプ)のご提供があったことから、岩切取締役にもご挨拶をお願いし、今後のセミナーへの講師派遣等の協力も戴けるといことも伝えて戴き、更に、3月8日実施予定のコーチングセミナーの趣旨目的等について講師役の栗栖佳子さん(「宙」代表)と下野淳子さん(オフィスルックス代表)にもご挨拶を戴きました。

時に楽しそうに、時に真剣に、、、
参加者の皆さんの表情です。
右端上下は、岩切さんと栗栖さん、
下野さんです

